
計画

Blackfruits

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

計画

【Nコード】

N4150L

【作者名】

Blackfruits

【あらすじ】

ひよんなことから賭けをするようになった二人。その賭けは彼にとっての計画であって、彼女にとって予想外をうむことになるのだった。

「じゃあこれよろしく」

目の前に山積みになった資料をみて、私は絶句した。

「これ、全部!？」

思わず声を荒げてしまう。

「ほら、生徒会長またどっか行っちゃったからさ、その分も」

どっか行っちゃったからって私に全部まわされても困る。

でも目の前にいる生徒会の役員も、自分たちの仕事の役目があるのだから仕方がなかった。

問題はあの怠け者の生徒会長だ。

もうすぐうちの高校では学校祭が開催されるというのに、この始末行事が始まれば仕事をするかなと思っていたのが馬鹿だった。

「それにしても……他の高校でもこれだけ資料集めるんですかね。力入りまくりというか」

私のつぶやきに他の役員が答えてくれる。

「うちの方は特に名門だしさ、学校祭って他より有名じゃん？ だから、いつも力の人れようがすごいんだよ」

「なるほど……」

でもだったら人選ももう少し慎重にした方がよかったんじゃないかと、私は思った。

「生徒会長っていつもこうなんですか？」

「そうだね……」

答える顔が苦笑気味だった。

なんであの人が選ばれたんだ……不思議でならない。

そう思っていると、一人の役員があつと声をあげた。

「これ、生徒会長出席案件だって。どうしよう」

「あ……代わりに出た方がいいんだろうけど……先生いるからなあ」
ため息交じりな顔が私に向けられた。

「そうだ……悪いけど生徒会長にこれ持って聞いて来てくれないかな？」

彼女は私に資料を手渡す。

「生徒会長どこにいるんですか？」

「屋上」

「屋上！？ あそこ立ち入り禁止じゃあ……」

「生徒会長の権限で、屋上の鍵あの人が貸し切りなんだよね」

これまた苦笑いしながら、彼女は言った。

私は肩をすくめながらも「分かりました」とそれを引き受けた。その足で怠け者の生徒会長に会いに行くことにした。

空には雲一つ無かった。

「少し……暇かも」

空に向かって一人ごとを話している虚しい詩人みたいな気がした。こんなことなら少くくらは生徒会の仕事したらよかったかな。いや、やっぱり嫌だ。めんどつくさい。

ガタンつと音がした。

その方向をみやると一人の女子が立っていた。

しかめ面をしながらこちらをみては、青空をみて目を細めた。

「今日天気いいよね」

その言葉に彼女は驚いたようにこちらをみたが、また少し不機嫌そうな顔に戻る。

「生徒会長……ですよね」

曖昧な感じだった。

そつえば、生徒会の初めての顔合わせくらいにしか公では顔を出していない気がした。

「一応ね」

と、軽く答えて見せた。

「生徒会長出席の案件が出てるんです。出席してください」

「なんだ、そんなことか。代わりに出ておいて」

「は？」

「俺は出ない」

彼女は面食らったような表情でこちらをみている。

そのまま屋上で突っ立っているつもりだった。

横目でちらりと彼女をみやると、彼女はぷるぷると震えた。

「こんなこというのもなんですけど……いい加減にしてください。

あなたのおかげでこっちに資料が山積みなんです。仕事しないならなんで生徒会長引き受けたんですか」

「いや、俺が引き受けたんじゃないやなくて生徒票……」

「なんであなたに入るんですか！」

「いや……そんなの俺が知りたいよ」

まあ、怒られる理由が大いにあるからよく分かる。

俺は少し考え込むような仕草をしてみせた。

彼女は何か言葉を待っているようだった。

「要は俺に仕事をしろ、と」

「そうです。要するにその通りです」

「じゃあ、楽しくしてみせて」

「え？」

俺は少し意地悪な笑みを向けた。

「確か今審議中なのは学校祭での各クラス共通催し物の是非。はっきり言えばどれ一つとっても面白いとは俺は思わない」

いきなりの俺の言葉に彼女は困惑したように見えた。

「君が楽しくしてみせて。そしたら俺も少しは仕事をしてあげる。賭けみたいなものだよ」

「賭けって……」

「あ、普通賭けなら君からも何かあるんだっけ」

俺は微笑した。

「ま、何もいらないよ。勝っても負けても俺にとっては利があるから。自信が無いならやめていいよ。俺がいなきゃ成り立たない生徒

会なんていずれ潰れるから」

わざと大げさに言ってみせた。

そうして彼女をみやると、眉間に皺が寄っていた。

いちいちリアクションが面白い。

「分かりました！ やって見せます！ その代わり約束守って働いてくださいね！」

言って彼女は思い切りドアを閉めた。

今年は面白くなりそうだ、と心の中で笑った。

屋上のドアを閉めて階段を下りるところで、はっと気付いた。

しまった……生徒会長に出席してもらうの忘れていた。

ちらりと内容をみやると、学校祭での催し物の話だ。

私は自分で言った言葉を思い出した。

これは、私がやるしかない。

生徒会室に戻って、私はみんなに自分が出ることを話した。

賭けの話は……なんとなく秘密にしておいた。

生徒会の人々を怒らせるようなことを言うのはまずい。

それから案件出席まで頭を振り絞りながら、催し物について考えていた。

「面白いもの……生徒会長が楽しいと思うもの……」

友達に聞いたり、先生に聞いたり、生徒会のメンバーに聞いたり、親に聞いたり……

色々繰り返しながら悩み続けた。

「そういえばね、昨年度はこれだったの。我が校唯一の画期的な催し物だって他校でも大絶賛だったの。生徒会長の提案だね」

国語の先生の出してくれた昨年度の学校祭催しをみて、私は驚いた。

「昨年度の生徒会長って……あの？」

「そう。昨年度は企画提案から運営まで全部生徒会長が中心になっ

てやってたの。ここだけの話、彼ね、実はみんな帰った後に全部案件やら資料やら目を通してみたい。今年の企画って正直あまり面白くないでしょ？ 生徒たちの声やらアンケートとって束を渡されたから、今の案件もまだ通ってないのよね。例年と違ってね」

私は初めて知った事実に驚いた。

家や学校で案件に悩みながら、生徒会長のことを一日中考える羽目になった。

数日後のこと。

「ふうん、いいんじゃないか？」

何回か駄目だしを喰らった後、ようやく生徒会長は首を縦に振った。

「やってみようか、この企画」

「やった！」

私は思い切り喜んだ。

だがその様子を生徒会長がみていることを意識したら、急に気恥ずかしくなった。

「でも……なんですか？ いつも仕事してるそうじゃないですか。賭けなんてする必要なかったんじゃない……」

彼はふつと笑った。

「俺が卒業したら、誰が今度そういうの企画するんだよ」

その言葉に私は開いた口が塞がらなくなった。

そこまで見越していたということ？

「でも約束だから少しは仕事してやるよ。少しは、な」

今まで見たことの無い優しい笑顔に、私は思わずどきりとしてしまった。

「で、どうだった？」

彼の顔がこちらに近づいた。

心臓が大きく跳ね上がった。

「な、なにがですか？」

彼は私の耳元でささやいた。

「ここ数日……一晩中俺のこと考えてた感想」

そのまま軽くくちづけされる。

私の思考が停止した。

彼は意地悪そうに微笑んだ。

「言っただろ？ 勝っても負けても俺には利があるって」

彼の言葉をようやく私は理解した。

自分の顔が真っ赤になるのが分かった。

私はようやく、全てが彼の計画だったと気づいたのだった。

（後書き）

未だに段落分けがおかしいので、ごめんなさい；
後でちゃんと修正しようと思います。
この話は結構自分でも好きな話です。
読んでくださった方に感謝をこめて
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150/>

計画

2010年10月11日08時18分発行